

W I N G E S S A Y

DENTAL WING Co.,LTD

—2016年 9月号—

☆酷暑の毎日、お元気でお過ごしですか？ 早朝の空気に、かすかな秋の気配を感じられる季節になりました。残暑厳しい毎日ですが、明るく愉快地に参りましょう。

☆連日連夜、オリンピックや高校野球など熱い戦いが繰り返されています。勝負ですもの、勝ち負けは避けられませんが、それ以上の感動はやはり見るものを魅了します。一流のアスリートと呼ばれる人たち、そこに辿りつくまでの道のりは、アスリートの数だけドラマがあるのだと思います。勝敗は別として、本当に立派なことだと思います。次の東京オリンピックでは、更なるメダル数が期待されます。大いに楽しみにしたいものです。

さて、今月は「紙の金メダル」というお話をご紹介します。

美術教師をしている小林さん(仮名)が、ある時小学校に代理で教員として絵を教えに行った時のこと。授業で、児童たちに校庭にある大きな木の写生をさせていました。すると、ひとりの児童が、木の幹を紫色に塗っているではありませんか。小林さんは、その子に「よく木を見て、こういう色じゃないんじゃないかな？」すると、その子は「いいんだ！僕は紫が一番好きな色なんだ。僕はこの木が一番好きな木だ。だから、一番好きな色を、一番好きな木にあげたんだ！」

小林さんは、子供に教えられます。しかし、いまの教育では木に紫を塗った子に最高点はあげることができません。考えた小林さんは、自分で紙の金メダルを作って、その子にあげました。

「学校の都合で5点の評価はあげられないけど、先生はこの絵はとて素晴らしいと思う。だから、特別にこの金メダルをあげます！」

そんな出来事があってから、数年後。小林さんはふと思い立って、この出来事をラジオ番組に投稿します。はがきは採用、放送されます。すると、驚いたことに、たまたまその放送を聞いていた、あの時の児童本人(すでに大学生)から、小林先生のもとに手紙が届いたのです。

その手紙には、こんなことが書き添えられていました。

「あの時、先生からもらった金メダルはいまも大切に持っています。」手紙には、大学生になった彼が、あの金メダルを首から下げた写真が同封されていました。そして、手紙の続きには……

「僕はいま、絵の勉強をしています。将来は画家になりたいと思っています。」

木の色を紫に染めた純真な子。そして、その子を認めてあげた立派な先生。

何か大切なことを教えてくれる物語ですね。

(心が「ほっ」とする50の物語 王様文庫から紹介させていただきました。)

何でもいいじゃないですか、派手でも地味でも。人に差し上げたい金メダルありますか？

いただきたい金メダルありますか？

一度の人生、輝きを止めない日々でありますように！

